
All is well that ends well.

J I N

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

All is well that ends well .

【Nコード】

N3238Z

【作者名】

JIN

【あらすじ】

名も泣き一人の少年の挑戦といえは聞こえがいいかもしれない、18年間ベットの上で過ごしてきた退屈な人生、毎日毎日勉強という名の時間つぶし
しかし、そんな俺にも誰にも言つたことが無いことが
まさかそれが現実になるなんて

始まりは終わりへの一歩

「終わり良ければ全て良し」、この言葉を聞いてある人は、果たして本当にそうなのだろうか？、そんな些細な疑問を浮かべる

生きてることに意味を持たない、ただベットで横になって18年
苦しみと絶望の18年間

そんなやつが、あの言葉に疑問に思っている
もう終わりしか来ないのに……

「おはようございます、起きてますか？」

「ああ」

聞こえない、聴こえづらいと言った方がいいのかそんな声が聞こえた
「さつさと起きてくださいよ、着替えを済まして、それから……」
あとの言葉は覚えてない、こんなの俺じゃない、こんなの夢だ……
俺はいつもベットのうえでしか生きていけない、生きてちゃいけない
人間なんだ

「だらしがないな、
　　つたら私の話聞いてるの？」

まだ続いている、いい加減にしてくれ、これは俺の世界じゃない！
目を覚ませ

チャイム音

やっぱりこうなるのか、恐る恐る目を開けて見えるのは白い天井
18年間見続けている絶望の色、吐き気がする

体は動かない、まだ意識だけが起きている状態だった

なんて融通の聞かない体だ、まるで幽霊が自分の体を見ているかのようだ

「おはようございます」

いつも聴いている声、これは夢なんかじゃない別に安堵しているわけじゃないが、こいつ以外喋ったためしがない

「体がうごかねえ」

「それはいつものことですよ？」

まったくその通りだ、うだうだ言うのは止めにしよう

「あなたの体が動くのは後30分後くらいかしら、それまでにいくつか質問するね」

「はいはい」

質問とは、俺の名前、年齢、地元、その他記憶に関する質問ばかりこうやって喋ってる時点で質問なんか要らないと愚痴をはいてみたときもあつたが、体が動かないんじゃないしょうがない、質問に答えるしかない

「夢は見た？」

「見てない」

この質問だけは嘘をつく、説明するのが面倒なのとこれは昔から覚えてのことだから

「もうすぐ体が動くから、好きなようにしてていいわよ」

「やっとか」

また天井、考えてるときは目を閉じる癖があるから見なくてもいいが、その癖はこの天井を見たくないから勝手に作った癖かもしれない

「お……」

体が動いた、ベットから起き上がれると思ったが現実はその甘くない、最初にベットが動き、背もたれのような感じで体を起こすように起き上がる、動くのは手だけ、テーブルの上のご飯を掴む

「いただきます」

食べ物を口に入れる、いつもと変わらない味、でもなぜか飽き

ることの無い味でもある

「ごちそうさま」

そういうと目の前の食器が片付けられていく、ベットがまた動き出す
「今日はモニターに移っていることを勉強しようね」

仰向けの俺の目の前にモニターが迫ってきた、内容はいたって普通
……じゃないか、俺の年なら普通は大学受験の勉強だろうな、しかし、俺の目の前に映っているのはそんなものとはかけ離れたものだと自信を持っていえる、こんなもの18歳でやるもんじゃない

毎日その繰り返し、俺の喋った内容をあいつがメモし質問して、終われば別に奴にそのメモを渡す、あれにはいったい何が書いてあるのだろうか、聞いてみたけど教えてくれない、

「なにぼーつとしているの？ 彼方らしくない」

「別に」

退屈すぎるといえば、この何倍もの量になるから俺は絶対に言わないようにしている、昔言ってしまったからな

「はい、今日は新しいところよ」

めずらしいな、でもどうせこれも退屈な時間になるんだろうな

俺に解けない物など……

「ああん!？」

「……。」

なんだこれ……俺に喧嘩でも売っているのか？ でも、こいつに聞くのも癪だな、どうしよう……

「どうかしたの？」

俺の声には気付いてないらしい、不幸中の幸いだ

「ちよつと考えさせてくれ」

「珍しいわね、この文章のロシア語に訳すくらい出来るでしょ？」

（何言っただこいつ？ そんな問題……）

目の前にある問題を何度見てもそんなものは書いていない、あるのはたった一行、だが……

「あのさ」

「今日はおかしいわよ、どうかしたの？」

「プログラムは絶対だよな？」

「その通りよ、さっさと始めなさい」

相変わらず俺に今日に無しだな、いいだろう、その態度がこのような結果になることを知らないクズなのだから

「答えはもちろんNOだ！、そして……これが始まりだ」

「何言ってるの？ 問題は……」

何も聞こえなくなった、目は一応の用心のため塞いでいたが、物音ひとつしない

「おはようございます、　、起きていますか？」

「ああ」

（やっぱりな……）

「早く起きてくださいよ、着替えも済まして今日は忙しいのですから」

「今日は何日だ？」

「西暦2012年1月1日の大変重要な日なのですよ！ 何を言い出すのですか！」

「ああ、そうだったな、これから始まるんだったな」

「そうですね！ 頑張らしましょうね」

「「殺し合いを！！」」

二人は玄関の扉を開けた

まったく何が「終わりよければ全て良し」だ
まだ始まってもねえじゃんかよ

でもこのときは何も知らなかった

この始まりは終わりへの一歩だということを

もうひとつのゲーム

子供のころは少なからず、友達と遊んでたに違いない
その遊びは時代ごとに変わっていく、今までもこれからも

皆さんは、こんな遊びをしたことはあつただろうか？

よくテレビで出てくるアメリカの西部劇、ピストルを持ったガンマンと呼ばれる人が荒野で戦うといったストーリーである

それに影響されてか、手をピストルのようにして友達と撃ち合ったりした、今考えたらなんて馬鹿馬鹿しいことなのだろうか

あれから何年たっただろうか

「もう12月だね」

「寒くなったね、寒さは女の敵だね」

「あのな、じゃあなんでスカートなんてお前は馬鹿か」

「ちゃんとストッキングはいてるから寒くないもん」

「寒くなったら上着貸すから、無理するなよ」

「うん！ 優しいね」

「馬鹿、茶化すんじゃない」

楽しかった、毎日こうして好意を抱いてくれる人の近くで笑いながら生きていけることに

「おはよう！」

「おはよ」

「今日もらぶらぶですな、お二人さん」

「ば……ばか！」

「はいはい、俺らを茶化すんじゃないの、お前も真っ赤になってんじゃねーよ」

「ななななってないよ」

「動揺してんじゃねーよ馬鹿」

「馬鹿馬鹿言い過ぎ！」

彼の背中を叩きながら私は真っ赤になった顔を隠すように早歩きをした、別に好きでもないのに……

「な〜にやってんの？ またいじめ？ 趣味悪いよお二人さん」

困ったときに頼るのはやっぱり親友だよね、私は彼女の後ろに隠れた「俺は思ったことを口にしただけだぜ、な〜」

「こいつと一緒にするな、お前もいい加減にしろって」

彼らは本当に仲が良いのか悪いのか、

「……くしゅん」

寒さが身にしみる12月

「やっぱり寒いんじゃないかよ、ほらよ」

無理してスカートはいて来たのがやっぱり裏目に出た……のかな？

「わ！ い……いきなり投げるなって……もう」

「ナイスキャッチ！」

登校途中の私たちが通行人の邪魔になっていることは言うまでも無かった

なぜか皆同じクラス、よくある話だけど

「今日朝礼だつてさ」

「こんな寒いのか？ 頭いかれてるって」

もうすぐ冬休みつてもあるけど、朝礼って……古臭いよね

「外かな？ 体育館かな？」

「さすがに体育館でしょ、私たちを殺す気じゃなければ」

「あれせこくない？ 教師だけベンチコートみたいな着てるの」
「分かるゝ火焚いてそのそばにいる奴もいるでしょ、ありえないよね」

生徒にとって先生ってどんな存在なのだろう、ドラマのような熱血教師は私たちには向いてなさそうだけど

「なーに考えてんの？」

「ん？ なんでもないよ」

顔が近いっつーの！ 彼は優しいけどあんたはなんか変に調子が狂ってしまう

そして朝礼、やっぱり外だったと、思いきや体育館ですることになった、先生空気読めてる！

でも……

「寒くね？」

「うん、寒い」

「外と変わらないじゃん」

「座りたくない」

文句しか聞こえなくなった、体育館に決まった時はあんなに喜んでたのに、まさか床がこんなに冷たいとは……

「早くおわんねえかな」

「今月から新しく赴任してくる先生を紹介します」

「誰だろ」

「興味ないね」

こんな時期に珍しいこともあるもんだ、でももうすぐ卒業の私たちには、なんの関係も無い、あるのは教師と生徒という関係だけ

「それより今日はどうする？」

「なにが？」

「だって退屈じゃん、大学も皆決まってるしセンター試験の奴らの顔色うかがって授業してるのもなんだし」

授業はほとんど自習だった、時期が時期だけあって私達終わった組からしたら退屈この上ない

だけど今日は違った、新しく赴任して来たあの人が原因だった

「このクラスでもう大学決まった人はどのくらい居ますか？」

私たちは手を上げた、

「どうせ隔離して別のことでもやってる、だろ」

小声であの人がつぶやいてる、でもその通りだ、私たちは別の教室に分けられてそのまま放置させられた

「なんだよこの対応」

「しょうがないよ」

「これ何のビデオ？」

各自おのおの自由に行動し始めた、私は本読むだけ

「これ面白そうだ、いい暇つぶしになりそう」

テレビのリモコンのスイッチを入れ始めた、これなんだろう、ハリウッド映画かな古臭い映像が流れてきた

「それにしても古臭いな」

「学校においてあるモノなんてこんなもんだろ」

それは一理ある、しおりを挿みテレビに目を向けた、荒れ果てた町、いかにもハリウッドって感じだった、どうせ銃の撃ち合いでも始まるのだろう

「どーせ、ピストルで撃ち合って主人公が勝つ話だろ」

「そんなこと言わないでよ」

彼女はこのビデオに興味があるようだった、ちょっと意外

「なーに笑ってんの？」

「昔、男子がピストルごっこやってたな〜って」

「こんな感じか？」

あの人が構えた瞬間……

「えっ」

「ちよつと……」

「おい……」

消えた

さっきまで、はしゃいでいた空気が凍りついた

彼女はその場に膝をついた

彼は言葉にならない顔をしてその場に立っていた

「何これ……」

意外にも私が一番最初に口が開いた

ゲームスタート

「痛たた、何が起こったんだ」

確か俺はあいつらと一緒にビデオを見てて、ピストルの真似をした瞬間、目の前が真っ白になったんだよな

思ったより冷静な自分がそこにはいた、むしろ慌てても何の意味も無い

「ようこそ、All is well that ends well」

「All is well that ends well? どこかで聞いたことある英語だな」

「突然ですがあなたの好きなものは何ですか?」

「あ?」

「これからあなたが活動していく上で重要なパートナーとなりますので慎重に選んでください」

「どんなものでもいいのか?」

「はい」

何でもいいのかよ……、なんか条件があったほうが考えやすいのに、逆に思いつかない

「時間をくれないか?」

「欲しいのですか?」

「いや、そうじゃなくて考える時間」

「時間でもいいのかよ……」

「あなたが欲しいものがこの後契約に則り説明いたします」

「モノじゃなくてもいいのか?」

「はい、しかし、ハンデがつきます」

それ相当の対価があるってことか、面白い、

「じゃあ……ロボット」

「イメージしてください、あなたの頭の中のイメージどおりのロボットを召喚いたします」

イメージどおりか、なら……

「お待ちください」

「なんだよ」

「ハンデをお忘れなく」

「はいはい、完璧すぎるとダメなんだろう」

「……」

「承知しました、これより召喚いたします、ただいまより制限時間20分をお渡しします、召還されたものの言葉に従いゲームを行います、くれぐれもルール違反をせずにだけ言っておきます」

「スタート」

目を開いた、まっさらな空間に浮いているよう感覚だった、目の前には俺のイメージしたとおりのロボットがそこにはいた、かなりサイズが小さいが、これがハンデってことだろう

「ようこそ、All is well that ends well」

「何でも教えてくれるのか？」

「はい、契約の範疇でございますが」

「この後どうなる」

「あなた様には、これよりピストルを使った、殺し合いをしてもらいます、」

えっ……

いまこいつ、なんて……

「殺し合い？」

「これよりルールを説明いたします、後で本をお渡しいたしますが時間がございません、簡単に説明いたします」

目の前に手帳が現れた

All is well that ends well. 10ヶ条

1、これより寿命をかけたガンバトルを行います。

2、ゲーム開始前に試し撃ちを行って自分のガンの種類を把握してください。

3、弾の上限は寿命です、パートナーにお聞きください

4、心の臓、すなわち現実世界の死が、このゲームのゲームオーバーです。

5、相手を倒すと倒した人が現在持っている弾数〓寿命をゲットできます。

6、パートナーは基本戦闘には参加できません、生かすも殺すも自分しだいです。

7、パートナーはこちらの規約内ならどんなことも出来ますしお答えします。

8、ゲーム終了はこちらがお知らせします、終わり次第現実世界に帰れます、

9、なお、ガンの銃弾は大変特殊な物の為、必ずパートナーにお聞きください

10、

なんだこのゲームは……、10の白紙も気になるが後で聞こう
今は生き残ることが大切だ

「残り10分となりました、ピストルを配布いたします」
小さな口ボットから紙をもらった

「あなたの寿命は70です、したがってガンタイプノーマルです」
70……、そんなもんか、

「短いとなんかあるのか？」

「はい、弾数が少ない」強力となっております」

「俺はずっとこのままか？」

「いいえ、奪うことも出来ます」

ピストルを構えた、重い……

「ここでの発砲はゲームと関係ありません、さあ練習しましょう、
両腕で持つて反動に耐えまはあれを狙ってください」

目の前能的が出てきた、両腕で持つて……

「こうか？」

「そのまま引き金を引いてください、連射可能です」

見事的に命中した、これなら戦えそうだ

「そこに書いてあつた弾のことなんだが」

「はい、ご説明いたします、この弾は如何なる物も貫通いたします」

「マジ!？」

「ですが、条件がございます、人間が直接あるいは、間接的に触れ
ているものに限ります、ですので防弾チョッキなどは着けていても効
果がありません」

「そ、そうだな、何か有効な活用方は無いのか？」

「プレイヤーに教えても良い活用方は、これだけです」

モニターが出てきた

「このように壁に触れていればガンで撃つことにより、その建物全てを貫通いたします」

「でもさ、」

「はい、思っていらっしゃるとおり敵にも同じことが言えます、ご注意ください」

残り1分

「これよりゲームスタートです」

「お前は何か出来るの？」

「あなた様がイメージしたとおりです、戦闘にはこの通り小さすぎて参加できません、肩に乗らせていただきます」

「オツケー面白くなってきたぞ、ぜってー生きてあいつらに自慢してやる」

目の前のまっさらとした景色が変わり、目の前に映るのはコンクリートの地面と無数のビル、

「相手はどのくらいいるんだ？」

「ざっとリーダーで確認しただけで100人います」

多い、でも面白い、ワクワクしてきた、死ぬのは怖いが死ななければ良い、絶対生きてかえるそれが第一条件だ

「俺はこの戦い、敵をなるべく倒さない、逃げて逃げて逃げ勝つ、逃走経路は頼んだぜ」

「御意」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3238z/>

All is well that ends well.

2011年12月16日20時55分発行